



シニアースカウティング ④ を考える

リープナイトの重要性について

<下>

稲葉睦美

リープナイト 夜話

そのII (シニア向き)

[1] スカウティングの目的

1. 人格 2. 技能 3. 健康と力 4. 奉仕
公民として役立つ人をつくることにある。何のためにスカウティングをやるのか。

人格とは、(1)先天的なもの (2)家庭的な環境 (3)社会的環境
によって形成されてゆく。

そして先天的なものは神がつくるのだ。

人には、みな長所と短所がある。自己をみつめ、常に反省し、理想をめざして努力することが大切である。

教養、自己反省、試練をつらぬくことによって人格は形成されてゆく。短所を少なくし、長所をのばすことによって欠点を直そうとする努力が必要である。失敗をおそれてはならない。行うことによって学べ。

〔2〕B-Pの考えておられる人間像

積極的な社会人性（隊長の手引 <注=絶版> P.24）、カブスカウトのさだめにある「すすんでよいことをします」ということにほかならない。

そこで神に誠をつくす（神への duty）とは生きてゆくために神から与えられた才能を、聖なる委託物として気をつけ、のばしてゆくのだということであり、身体は健康と力と生殖力をもって神のご用にたつべきこと、精神は驚くべき理性と記憶と認識をもって、万物の霊長らしくあること、心は人の心の中にある神の片りん、すなわち愛を絶えず表わし、実行することによって、大きく強くすべきことなのである。このようにして、神に誠をつくすということは、神の慈愛に頼るばかりでなく、他人に対する愛を実行に表わすことによってその意志を行うのだ。（隊長の手引 P.104）

○スカウト章ゆりの花びらは愛を表わす。3つの花びらのうち、真ん中の花びらは北を指すコンパス、スカウトサインの意味もあわせて人生の道しるべ、そして2つの星は真理と知識、真ん中の鏡（えい智）は心をつつし、常に反省を怠らないという意味をもっている。スカウトの進歩課程の基本に書かれてあることば、ひとつひとつに深い意味があることをよく考える必要がある。

○日本連盟教育規定14条

本連盟は、すべての加盟員が、それぞれ明確なる信仰をもつことを奨励する。しかし、スカウト運動における宗教は各自の自由意思でよいことをB-Pはさとされている。それは宗教の教える最終目的がいずれの宗教であっても人間を幸福にするということから、B-Pは宗教の自由を認めたのである。（隊長の手引 P.103）

○スカウトの「ちかい」と「おきて」はB-Pの人格を形成した家庭環境（牧師の家庭）から発想されたものと思われる。だからスカウト運動はスカウト教ではない。

○芭蕉の言葉

古人の求めし跡を求めず、古人の求めたると

ころ（心）を求めよ。

スカウト活動、その生活の公分母は、「ちかい」と「おきて」である。その上にたって各自のスカウトが存在しなければならない。

公分母のない活動はスカウティングではない

自発活動（積極的にい行い評価反省して進歩）
「ちかい」「おきて」（宗教の教える人生の道）

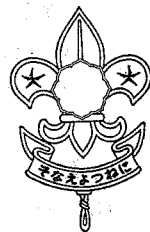
○プログラム作成にあたっては、個々のニードが重視され、どんな面白いプログラム、冒険と社会活動とすぐれたスカウト技能と、シニアースカウトらしいスケールの大きい、ダイナミックなプログラムを組んでもよいだろう。もはやカブスカウトでもボーイスカウトでもない。たくましく男らしい社会人としての第一歩を歩みはじめる君たち、今こそみがきにみがき、スカウト訓練の成果を表わすときなのだ。

○「試練を越えて」「より強くたくましく」「後につづく者のために」

そして「挑戦」「シニアードベンチャーキャンプ」「ルックワイド」「精究教理」また、「世界の中の日本」をプロジェクトテーマとして取り組み、経験してゆくことはすばらしいことではないか。

〔3〕自発活動とは

- ・自ら求める心、求めないではすべてのことは始まらない。
 - ・楽なことばかり求めていると、苦しいことがふえてくる。
 - ・やむを得ずすることは苦しいが、進んですれば喜びがわく。
 - ・青年よ大志をいだけ。（クラーク）
 - ・人間、志を立てるのに遅すぎるということはない。（ボールドウィン）
 - ・大切なことは、大志をいだけ、それをなしとげる技能と忍耐とをもつことである。その他は、いずれも重要ではない。
- （ゲーテ）
- ・われ志を遂げずんば、再



び帰らず。(野口英世)

〔4〕感謝

- ・感謝の心が無いと恵まれていることに気がつかない。
- ・心豊かな人は感謝を持ち、心貧しい人は不平をいう。
- ・他人に善を施すことは、また自分に善を施すことである。
- ・幸福は与えられるものでなく、心の中に創り出すものである。
- ・小さな幸福を大切にすることから幸せが始まる。
- ・真心をつくしたことは、他人は知らなくても自分を支える力となっている。
- ・人に施したことは忘れ、人より受けた恩を忘れるな。

人のお世話にならぬよう、人のお世話をするように、そして報いを求めぬよう。

(後藤 新平)

〔5〕忍耐

- ・生別、死別の悲しみがある。それにたえなければならぬ。
- ・侮辱されても忍ばなければならない時がある。
- ・言いたくとも言えず、したくともできないことがある。
- ・残念なことがある。くやしいことがある。
- ・全く無実の悪評を受けることがある。弁解しなくてはと思うときがある。
- ・忍耐とは、自分を押さえることではない。希望をもって耐えることである。
- ・人の真価が発揮されるのは、困難につきあつた時である。甘ったれを育てる家庭と社会、多くの苦しみをなめた人は知ることも多い。

うきことの数多かれと祈るなり

限りある身の力ためさん

(山中鹿之助, 15歳)

患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出す。そして、希望は失望に終わることはない。

(聖書ローマ人への手紙5—3)

この道をゆけ、このおそろしい嵐の道をはしれ、大きな力をふかぶかと、彼方に感じ、彼方をめがけ、わき目もふらず、ふりかえらず、じゃまするものは家でも木でもけちらして、あらしのように、そのあとのことなど問うな。

勇敢であれ、それでいい。

(山村暮鳥詩集, 先駆者の詩)

菊の花はかおりを放つもの、隼は大空を力強く飛ぶもの、そして富士は最高の努力をしたしるしのもの。しばんだ花木にとまったまま飛べない鳥になるな。真理とは自然の法則に従うということ。スカウティングによって広く見(ルックワイド)、広く経験して、人生の真理をつかめ。

自分で探し求めよ。自分のカヌーは自分で漕げ!

〔6〕奉仕心

奉仕とは神(仏)に対して行うもの。神のしもべとしての仕事をすれば、すべてに喜ばれることになる。人間と人間との関係ではない。すべてに寛容さをもって平等に考えるべきである。

あなた方は地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味をとりもどせようか。もはや何の役にもたたず、ただ外に捨てられて人々にふみつけられるだけである。あなた方は世の光である。山の上にある町はかくれることができない。

またあかりをつけてそれを灯の下におく者はいない。むしろ燭台の上において家の中のすべてのものを照らさせるのである。そのようにあなた方の光を人々の前に輝かし、そして人々があなた方のよい行いを見て、天にいますあなた方の父を、あがめるようにしなさい。(マタイによる福音書5—15)

〔7〕スカウトわれら……

私たちはその名誉にかけて、ちかいをたてスカウトになった。Once a Scout, always a

Scout という言葉どおり、いかなる場合にも、スカウトであったことを忘れないようにしよう。それはユニフォームを着ているとき、活動に参加しているときだけを指すのではない。

SCOUTとは、世のため、人のためにつくした人、世の先駆者のすべてを指している言葉である。

B-P の最期のメッセージに言われたスカウト精神は、大人になってからも忘れないようにしよう。

周囲の誘惑に負けずに考えて行動してゆくことが大切なのだ。そしてその誇りをもって進むことが必要なのだ。世界の人、本当に多くの人たちから期待され、喜ばれたからこそ、60年余りの短いうちに世界の国々にスカウト運動が起こったのである。

その意義を考えて正しい人生観をもってほしい。それがルックワイドをテーマとしているシニアスカウティングの目的なのだ。

(神奈川連盟副コミッショナー、医博)

スカウティングと人生

●中 田 修

私は、今まで、スカウティングと自分とのかかわり合いについて、真剣に考えたことなど一度もなかった。単挑戦に当たり、この小論文でそれについてじっくり考えるという機会を得られたので、シニアスカウトとしての、また高校生としての、私が歩んできた道を簡潔にふり返り、それによって、今自分は何をすべきなのか、スカウティングは、自分にどのような影響を与えているのか考えてみたいと思う。

ボーイスカウトのころ、シニアに対しては、ゴールデンアックスによる厳しい訓練のうわさから恐ろしいところというイメージしかなかったが、その後シニアスカウティングについて、シニアの隊長からいろんな話を聞いていくうちに、自分の限界を思う存分試すことのできる場、であることがわかり、ある種の期待が生まれた。

シニアに上進して、まず私に与えられた任務は、BS隊の隊付きであった。隊付きの仕事はBS隊の班長時代のそれ以上のもので、探せば探すほど仕事が出てきたけれど、私には、そのひとつひとつを確実に仕上げていこうという決意があり、それが目標でもあった。

ところが、その頃の私は、隊付きのあり方について考え違いをしていたようだ。もちろん、与えられた任務を確実にやることも隊付きの仕事のひとつだろうが、私はそれのみしか頭になく、「上

級班長を助け、それによって自分も学んでいく」という最も大切な「向上心」を忘れていたように思う。

私は仕事を切り詰めてでも、なるべく多くプログラムに参加し、自分にとって、最も欠けている

「リーダーシップの感」を養うべきだったのだ。**シ**ニアに入隊してから、1年半が過ぎ、とうとうことし(注=51年)の1月、ゴールデンアックスに入隊するはめになった。「はめになった」と書いたが、これは入隊当時の気持ちであって、数々の訓練を経てきた今、その考えは大きく変わってきている。

それまでの自分は、平々凡々としすぎていて、あまりにも「考える」ということをしなかったのではないだろうか。そのお陰で私は、真正面からシニアに取り組めたように思う。

それまでの自分のシニア活動は、隊付き、あるいはジャンボリーが主体であったためか、入隊前に期待していた「シニアだから、思い切りやれる」ということから、だんだん離れていくような気がしていた。間のあいた気持ちであったそれがまさに、今自分のなすべきことが定まったようなのだ。

アックスは、私にとって貴重な体験だった。それによって得られた教訓は、大きなものだったに違いない。そこで、私がアックスによって得

たことを具体的に述べておきたい。

まず、今まで試したことのないことに初めてぶつかった結果、自分の知らなかった可能性を知ることができ、これにより生活に塩の必要性を強く感じたということだ。そのお陰で私は、苦勞というものがどんなに大切なものかわかり、これからは、これによって、どんな困難なことにも、まず、ぶつかってみて、それから自分にとって困難なものだったかどうかみきわめるつもりだ。

またリープナイトでは、スカウティングの根本について、自分は何も知ってはいなかったということを知らされ、それまでの自分がいかにスカウティングというものを考えず、ただ何となしにスカウト活動をやってきたということを認識した。

このことは、今のシニアスカウトほとんどに言えることではないだろうか。それほど、今のシニアスカウトは、私を含めてあまりにも基本というものを考えていないと思う。私たちは、基本ができて、初めて応用ができるのだということを忘れていないか。

それを考えてみると、やはり、リープナイトの重要性がひとと感ぜられるのである。それから、他の隊の交流によって、今まで自分が自分をみつめてきた方向以外からもみつめることができ、それまで自分が知らなかった悪いところを知ることができたので、これからは、もっと幅の広いスカウト活動をしようと思う。

以上のようなことを考えてみると、ゴールデンアックスに参加して、本当によかったと思う。また、これらの私の得たことは、ゴールデンアックスだからこそ得られたというものも少なくはないはずだ。いまさらながら、その組織力の大きさに驚くとともに、ぜひ日本中に広めたいものである。

次に私の高校生活について述べてみたい。私は入学するとき、高校生活に対しての希望に燃えていたが、高校生活に入っている今、だれもが感じるように私にも、高校生活についての白々しさと無気力感を覚えずにはいられない。一体、どうしたら、その無気力や白々しさから抜け出るこ

とができるのだろうか。

それには、吸収欲を持つことによって解決できるのではないかと思う。なぜなら、人間はだれしも、いろいろなものごとに対しての興味というものを持っているに違いないから、その興味に没頭すれば、無気力感や白々しさは、知らず知らずのうちに薄れていくはずだ。

事実、私も最近、テレビの構造や化石あるいは鳥類、催眠術など、いろいろな物事に関心を持ち始め、それに没頭することによって、自分が感じている無気力感や白々しさを克服している。

そして、これこそが今、私たちの成すべきことであって、リープナイトで教えられた「ルックワイド」ということではないだろうか。

また、これらの吸収欲は、スカウティングが目を開かせてくれたに違いない。これからは、吸収したものをもとに、そして、いままでの反省を土台として、もっと良く、シニアスカウティングを認識し、それによって、将来の指針を定め、まっしぐらにつき進もうと思う。

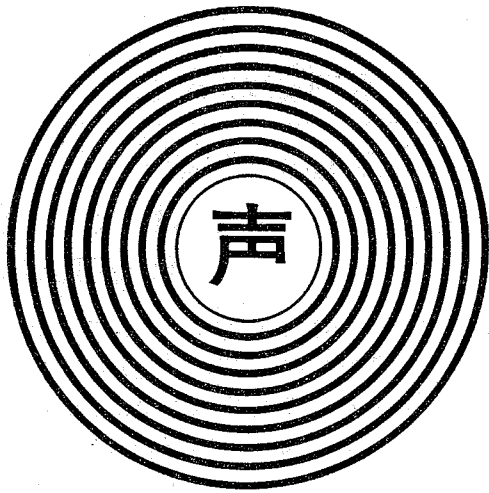
こうしてみると、スカウティングは、知らず、知らずの間に、私に浸透してきているようだ。しかし、私にはまだ、スカウティングと自分のかかわり合いは何なのかということを述べることはできない。

私にとって、スカウティングとは、広く、果てしない砂漠のようなものである。今、私は砂漠の中のオアシス目指して歩きはじめている。もちろん、それについての障害はあるだろうが、私は砂嵐にじゃまをされ、しんきろうに惑わされながらも歩き続けるつもりだ。もしかすると私はオアシスにたどり着けないかもしれない。

しかし、そのオアシス目指して精いっぱい歩いたという満足感があれば、それでいいと思っている。もしかすると、それ自体がオアシスかもしれないのだ。行手は今、砂嵐に包まれている。しかし、私は進む。北を指すコンパスをたよりに。なぜなら、私はそのコンパスを信じているから。

(大和第2団 イシュメロ班班長)

——湘北地区報第6号から



シニアスカウティング における一考察

富井 栄

スカウティングは、ボーイスカウトの段階までは、いろいろと問題があるといっても、その障害はスカウト個人についても、隊にあっては乗り越えられないものではない。

だが、高校進学、大学進学（あるいは就職）の時期が近づくと、1級ボーイあたりからシニアスカウトにかけて、スカウト、隊、ひいては団までがその存在を脅かされるような深刻な問題にぶつかる。

カビン、ボーイスカウティングと真剣に取り組んできた彼らが、シニアスカウトになって、あるものは、これらの個人の資産を惜しげもなく捨て、またあるものはスカウティングに未練を残しながら目前の目標へ進んで行くのである。

彼らは、必ずしもスカウティングに興味を失ったのではない。昨今、特修章、技能章の大幅な改正は、スカウティングをなおいっそう魅力あるものにしていく。

いま、団にあるものは、直接訓練に携わるものも、そうでないものも、総力をあげて、彼らが長年かかって築き上げたこの大いなる遺産を生かすように努めねばならない。

そこで、私は団委員の立場から、シニアスカウティングにおけるインストラクターの制度をできるかぎり活用したいと思っている。

シニアで単スカウトの資格を持つ者は少なく、まして富士スカウトとなると数えるほどしかみられない。これでは、雄大なスカウティングの発展は望むべくもない。

私は、スカウティング発展の原点は、スカウト個人にあるとみる。組織、機構、制度は立派なものであり、私のお世話になった団、現在お世話になっている団についても、その感を深くする。

それなのに、ややもすれば、シニアスカウト以上になってのスカウトが、後に続かないのである。彼らは優れた素質をもっている。その彼らがスカウティングから、去ってゆくのである。あの「ちかい」をたてたスカウトが……。

誠に残念というほかはない。だが、私はその原因の大部分を進学問題とスカウティングの前進の方法を知らないためだと思う。

理屈をいえば、スカウティングが進学の妨げになると泣きごとをいうスカウトは、たとえスカウティングをやっていないなくても、進学に苦勞する人たちであると、いうのは言い過ぎだろう。

現実の受験戦争は、どんなに厳しいものであっても、それは避けられないものである。となれば男として、堂々と乗り越えて行かねばなるまい。徒らに他に目を向け、エネルギーをむだに消費してはならない。

そのためには、個人のプロジェクトとして進学を選ぶことをおすすめる。それは、スカウトにとっては、試行錯誤の連続であるかも知れない。だが、スカウトは、それを恐れてはならない。彼らの主体性を尊重しつつも、その至らぬ点を団委員は、団は、プログラム指導者に協力し、温く見守り、時に励まし、そして彼ら自身は後に続くスカウトのためにも、がんばり抜かねばならない。

このときにこそ、シニアスカウト魂を発揮してほしいものである。その具体的道を私もスカウトたちと共に悩み、苦しみ、歩み、乗り越えてゆく決意である。

(東京連盟・八王子第7団団委員)